

パリ通信・第140号 2023年8月号

郵便配達人フェルディナン・シュヴァルの理想宮

リヨンから南に80km、グルノーブルから西に70km、ヴァランスから北に45kmの位置に人口2000人足らずの小さな村「オットリヴ」(Hauterives)がある。緑豊かで起伏が美しく、ローヌ河支流ドローム川(la Drôme)の清い水が流れる田舎だ。この地に「郵便配達人フェルディナン・シュヴァルの理想宮」が建っている。

フェルディナン・シュヴァル(1836-1924)は「オットリヴ」に近い「シャルム・シュル・レルバス」(Charmes-sur-l'Herbasse)の貧しい農家に生まれる。小学校に行かない子供も珍しくなかった当時、両親が捻出したお金で6歳から12歳の初等教育を受ける。

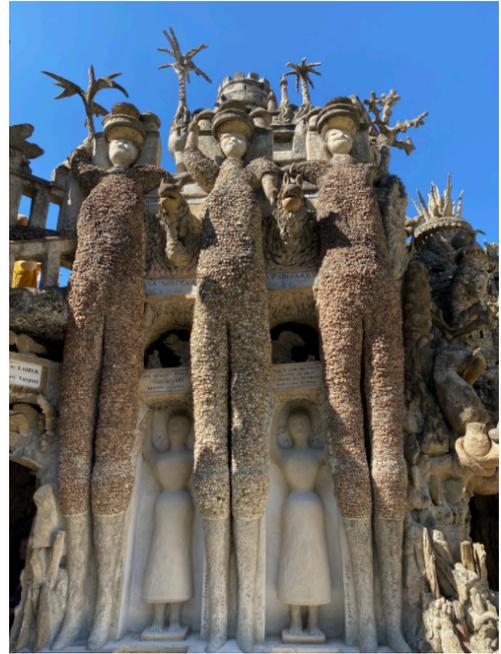
1847年母親、1854年父親を亡くし、二度に渡るエルバス川の氾濫で農業を諦め、1870年普仏戦争兵役の代わりにドローム県庁所在地ヴァランスのパン屋で勤労奉仕する。1858年結婚するが生活苦に変わりはなく、読み書きができたことも幸いして、1867年郵便配達人の職を獲得する。10年間は転勤が続いたが、1878年から「オットリヴ」郵便配達員となり、周囲30-40kmの配達区を歩いて廻ることになる。60歳で定年退職するまで昼間は郵便配達、夜と休日に石とモルタルで工事を続ける日々が続く。



1879年偶然「躓いた石」から発想を受け、郵便配達の道すがら見つけた面白い形の川石を拾っては持ち帰った。1912年完成するまで33年の年月を費やした。南北の長さ26m、東西の幅14m、高さ8~10mの類まれな「理想宮殿」で、バロック・オペラの背景、映画の舞台になりそうな幻想的で東西文化が混在する奇妙な建物である。1969年当時の文化大臣アンドレ・マルローによりナイーヴ・アートとして文化財の指定を受ける。

建設工事は東のファサードから始まる。「命の泉」を中心に右手には「聖アメデの洞窟」「知恵の泉」「エジプトの宮殿」、左手には「3人の巨人」(シーザー、ガリア戦争中紀元前52年アレジアの闘いでシーザー率いるローヌ軍に敗れるガリア軍長ウエルキンゲトリクス、アルキメデス)が立っている。

西のファサードには「イスラム教のモスク」「中世の城」「アルジェの四角い家」「スイスのシャレ」「ヒンズー教の寺」など東西建築が渾然一体に配置されている。



郵便配達員だったフェルディナン・シュヴァルは海外旅行をしたこともなく、建築の専門知識があった訳でもない。「理想宮」のモデルとなったのは、日々配達する絵葉書であり、当時の会員登録制雑誌の挿し絵や版画だった。特に「Le Magasin Pittoresque」(絵のように美しい店)(1833-1938)、「Les Veillées des Chaumières」(藁葺きコテージの夕暮れ時)(1877~)の2冊から世界の建築を知ることができた。建築の専門知識はなく、一つ一つの石をモルタルで固めて築いた。時間と共に風雨に晒され、傷みや滑落、安全性も問われる。シュヴァル没後は村が買上げ、基礎コンクリートを流して土台を固めた。動植物の装飾は鉄筋コンクリートで修復された。現在北と西のファサードの修復が終わり、修復は今後も続けられる。たった一人で一つ一つの石を積み上げた「理想宮」は建

築の原点とも言えるだろう。

夏休みには一日平均1500人、年間25万人の見学があるそうだ。毎時間解説と案内を担当してくださる職員の方によれば、フェルディナン・シュヴァルは当時の田舎には珍しく「著作権」の意識を持っていた人だった。1905年には建設中の「理想宮」見学を企画し、自ら案内した。当時は絵葉書の時代で絵葉書に使う写真には著作権料を求め、宮殿前で本人がポーズをとった写真も多い。

人の想像力と何かをやり遂げるという強い意志が「理想宮」という形で一世紀過ぎた今日もなお残っている。たった一人でできることに感心すると同時に、何を後世に残せるかを考えさせられる見学だった。（古賀順子記・写真撮影）